

恋するオオカミにご用心

ステージやブースを完備した、六本木の有名クラブ。非日常空間を演出するそこは、週末の夜はいつも若者たちであふれ返る。ただこの日は貸し切りのため、一般客は立ち入り禁止になっていた。今日はここで、吉住モデルプロモーションの設立三十五周年記念パーティーが行われているのだ。

インターネットなどで情報が漏れているのか、追っかけのファンがビルの周囲にちらほらと佇んでいる。人気のあるモデルや俳優が来ているとなれば、それは当然だろう。

クラブのフロアでは、DJミックスに合わせて若いモデルたちが楽しそうに踊り、年配の業界関係者たちはアルコールの入ったグラスを手に談笑している。各々が、この無礼講のパーティーを楽しんでいた。

パーティーには、アットモデルプロダクションでマネージャーをしている二十五歳の藤尾みやびも招待されていた。みやびは関係者に挨拶しては場所を移動し、次から次へと歓談の輪に加わる。

一時間も経つと肩の力も抜け、パーティーを楽しむ余裕も生まれていた。
そう、そのはずだった。

一息つこうと輪を離れた時、他事務所の男性マネージャーに声をかけられ、ふたりきりで話すこ

とになるまでは……

この時、みやびの表情は引きつっていた。

女子校育ちのせいか、みやびはこの年齢になっても男性と話すのが苦手だった。なんとか直した
いと思っではいるものの、まだ上手うまくいつていない。

「さすが大手の事務所ですよ。吉住社長の人脈よしずみって本当に凄いな」

「は、はい……そうですね。あの……、わたしもそう思います」

「あつ、藤尾さんのところの安土社長あつちが、吉住社長と話してるよ」

氣遣きぢってくれているのか、彼は会話を続けようとしてくれるが、みやびは気の利きいた返事ができ
ないでいた。彼が困ったように苦笑する。

「俺もあとで安土社長に挨拶あいさつさせてもらうね。それじゃ、また現場で会った時はよろしく」

「はい！ あの……こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」

みやびは男性マネージャーに頭を下かげ、歩き去る彼を見送った。

また緊張してしまった……

みやびは肩を落とし、ふーっと長い息をついた。

いったいどうしたら、男性の前でおどおどしなくなるのだろう。

アルコールの力を借りるのは本意ではないが、それで少しでも気合が入るのなら……

みやびは手にしたグラスを口へ運ぼうとした。

「みやび、見てたわよ！」

突然声をかけられて振り向く。そこにいたのは、事務所の先輩マネージャーの皆川みながわだった。

「男性相手だとまだ緊張が取れないみたいだけど、入社当時に比べたら……うん、進歩だね」

皆川は笑いながら、みやびの肩を優しく叩いた。

「ありがとうございます。これも皆川さんが根気良くご指導してくださったお陰です」

みやびは皆川と向かい合っていると、自然に笑顔になった。

彼女はみやびに、マネージャーの仕事を一から叩き込んでくれた人だ。でもそれだけではない。

お洒落しゃれに無頓着むとんちやくだったみやびに、似合う化粧と服選せんびを教えてくれた。腰まで届くストレートの黒
髪をボブスタイルにするよう勧め、その髪にカラーを入れ、毛先にだけパーマをかけると似合うと
いう助言すけいをしてくれたのも彼女だ。

こうして皆川の意見を取り入れたことで、みやびもなんとか年齢相応の女性に見られるよう
になったのだ。

今日着ている膝上丈のキャミソールドレスも、以前皆川と一緒に買い物した時に見立ててもらっ
たもの。胸元に入ったアコーディオンプリーツは、みやびを可愛らしく見せつつ女らしさも強調し
てくれていた。

どうすればその人物を引き立たせることができるか、皆川は良くわかっている。さすが、スカウ
トまでこなす敏腕みんわんマネージャーだ。

頼もしい先輩の傍そばで口元をほころばせたその時、皆川が急に視線を移した。

「奈々ちゃん、今日はかなりはしゃいでるみたいね」

皆川の視線の先を見て、みやびは「はい」と答えた。

DJブースの前で笑顔を見せているのは、みやびが担当している二十歳の西塚奈々。彼女は読者モデルから専属モデルへと成長した、アットモデルプロダクションの若手有望株のひとつだ。メディアへの露出も増えてきている。

最近仕事が忙しく休みもなかったので、その鬱憤を晴らしているのだろう。

もう少し落ち着いてほしい気もするが、今日のような盛大なパーティーでは仕方がないのかもしれない。

奈々は、同じ事務所の女性モデルと一緒にだった。そのモデルが、手にしたウィッグを頭上で振り回したり誰かの頭にかぶせたりしている。奈々はそんな彼女と一緒に、笑い合っては元気に飛び跳ねていた。

「まっ、パーティーは楽しむものだし、今日は仕方ないかな。それに——」

「皆川さん！ みやびん！」

突然、皆川の言葉を遮るような甲高い声が聞こえた。慌ててそちらへ向くと、同じ事務所の先輩マネージャーがこちらに駆け寄ってくるどころだった。

「どうしたの？」

「き、き、来ましたよ！」

彼女はどもりながら、訊き返した皆川とみやびを交互に見る。

「大賀見さんですよ！ パーティが始まってもずっと姿が見えなかったもので、来ないんだとばかり思っていましたけど、たった今来たみたいです！ 吉住社長に挨拶します」

大賀見さんが来た！

みやびの心臓がドキンと高鳴った。

彼の名を心の中で囁くだけで肌が粟立ち、熱い想いが全身の血管を駆け巡る。突然湧き起こった反応に、喉の奥で低く呻きそうになった。

そんなみやびの隣で、皆川が頷く。

「来ないわけではないわよ。大賀見さんにとって、吉住社長は恩義のある人だもの。吉住社長のところモデルをしていたのに、絶頂期に引退。直後、社長の下で経営の勉強を始めるだなんて。それだけでもびつくりなのに、独立して新事務所設立でしょ。しかもたった数年で事業を軌道に乗せ、先月には自社ビルが完成。才能あり過ぎよね」

「彼って、まさにモデル業界の風雲児ですよ！ 人目を惹く立ち姿もですけど、あの甘いマスク、低い声、引き締まった見事な体躯……ああ、やっぱりいつ見てもカッコいい！」

皆川の隣で、先輩がうっとりとして歓喜の声を零す。その横でみやびは、話題の中心にいる大賀見一哉にこっそり目を向けた。

吉住社長と言葉を交わす彼の姿を目にした瞬間、胸がドキドキし始めた。それに比例して、傍で話す先輩たちの声が遠ざかり、音楽や騒ぐモデルたちの声もどんどん小さくなっていく。

聞こえるのは、耳の傍で太鼓を打ち付けるように激しく脈打つ、自分の拍動音のみ。

頭がボーッとしてくる。なのに、特別なオーラを放つ大賀見から目を逸らせなかった。

大賀見は、ICHIIYAの名でモデル界を席卷した元有名ステージモデルだ。その均整のとれた体軀、端正な甘いマスクで女性たちを虜にしてきた。

黒々とした目力のある双眸や真つすぐな鼻梁。そこからは男らしさが匂い立っている。柔らかそうな唇や優しい笑みは、女性の心を惑わす官能的な艶っぽさがある。人の目を釘付けにする彼は、業界内では引つ張りだこだった。

その大賀見がモデルを引退してもう十年。三十二歳になったというのに、今もその魅力は色褪せていない。それどころか、年を重ねるごとに男の色香が増している気さえする。

「……ねえ、みやびん。あたしの話、聞いてる？」

突然自分の名を呼ばれて、みやびはハッと我に返った。慌てて隣の先輩を見る。

「すみません！ あの、なんの話……ですか？」

先輩がニヤニヤしながら、ふふつと笑う。

「今ね、皆川さんと大賀見さんの話をしたの。彼つて誰に対しても優しく、人当たりが良く、平等でしょ？ でも、それつて恋人に対しては違うんじゃないかなつて。名前のとおり、カノジョにはオオカミになつちやいそうじゃない？」

オ、オオカミ!?

みやびの脳裏に、オオカミに変身した大賀見が浮かび上がる。

そして、そのままカノジョに……

みやびにとつて、彼が綺麗な女性を激しく求める光景は生々し過ぎた。血が沸騰したかのように感じ、軀が熱くなる。

「ちよつと、余計な推測しないの」

皆川が楽しそうに笑う先輩を窺めるが、先輩は引き下がらない。

「でも、皆川さんだつてそう思いませんか？ 大賀見さん、きつとカノジョの前では獐猛な捕食動物に早変わりですよ。もしみやびんがカノジョだったら、きつと何をされているかわからないままオオカミに……ペロリだね！」

「ちよつと！ 誰が聞いているのかわからないんだから、もつと声をひそめなさい！」

皆川に言われて、先輩が素直に「はい」と言う。でもみやびは、生々しい会話に頬を真つ赤に染めていた。抑えなければと思うほど、どんどん火照りは増していく。

「あつ、ごめんね。みやびんにはちよつと刺激が過ぎた？」

「いえ、あの……はい」

手の甲を頬にあてて、熱を冷まそうとしながら素直に答えた。だが、みやびのその態度が、先輩の遊び心に火をつけたみたいだ。先輩が楽しそうにニヤリとする。

「それでどうなの？」

「えっ？」

「ついさつきまで大賀見さんをこっそり見てたでしょ？ もしかしてみやびんつて……大賀見さんのことが好きなのかなと思つて」

えっ？ ……ええっ!?

みやびは目を見開き、大きな音を立てて息を吸った。そんな風にはばり気持ちを言い当てられるとは思っていないかった。

「いいえ……いいえ！ わたしは大賀見さんを好きじゃありません！」

咄嗟とつきに嘘をついてしまつて、みやびはハツとした。別に取り繕わなくても、先輩たちならみやびを応援してくれる。それがわかつてても、どうしても素直になれなかった。

心のどこかで、彼との出合いを大切にしたいという思いがあつたからかもしれない。

みやびが大賀見を好きになつたのは、約四年前。まだ大学四年生の時だった。

ミスキャンパスコンテストの特別審査員として来た大賀見に声をかけられたのが切っ掛けで、みやびは今も彼に恋している。彼と言葉を交わしたのはほんの数分だったが、裏方のみやびにまで気を遣ってくれた優しさに心打たれたのだ。

化粧もせず埃ほこりまみれでジャージ姿のみやびは、決して彼の興味を惹ひく女性ではなかつたはずなのに……

この業界に入って大賀見と再会を果たしたが、彼はみやびを覚えていなかった。それも当然だろう。だが、それは全く関係ない。想いを心に秘めながら、彼をこっそり見つめられるだけで幸せだった。

このことを、みやびは誰にも話していない。まだ自分だけのものにしておきたいという気持ちが強かつた。

みやびは勇気をふりしぼつて顔を上げると、生唾なま唾をゴクリと呑み込んだ。

「あの、もちろん先輩が思うように、大賀見さんは素敵な男性だと思います。でもわたしの……好みとか離れてる……というか」

その点は嘘じゃない。確かに大賀見のことは大好きだが、理想の男性は、昔から物静かで穏やかなお兄さんタイプだ。

「そっか。みやびんは大賀見さんが好きなんだと思つてただけど……。でも、それは現在の話で、将来はどうなるかわからないよね？」

まるでみやびの気持ちは知つているとでも言いたげに、先輩はにっこり笑つた。

「はい、その話はもう終わり！」

皆川が手を胸の前で叩いて言つた。彼女の意味深な言葉に内心ドキドキしていたみやびは、やつと胸を撫で下ろした。

「すみませんでした。でも、みやびんがあまりにも可愛くて」

先輩は肩をすくめて謝つたが、またすぐにみやびに目を向ける。

「嫌な思いをさせちゃつてごめんね。ところで恋バナが出て思つただけど、奈々ちゃんの様子はどう？ メディア出演が増えてきたせいかな、最近綺麗になつている気がするの。こういう時つて、恋愛が関係していることもあるから気を付けてね。うちの事務所は恋愛NGだし」

奈々の名前が出るなり、みやびは背筋をピンと伸ばした。

「はい。十分に気を付けます」

「うむ、頼む」

真面目に言いながらも、わざとおちゃらけて安土社長の口癖を真似する先輩。みやびと皆川は顔を見合わせてぷつと嘖き出した。

皆でひとしきり笑い合ったあと、皆川が腕時計に視線を落とす。

「それじゃ、またあとで会いましょう」

皆川はみやびたちに頷くと、他のマネージャーたちの輪へ向かって歩き出した。

「じゃ、あたしも行くね」

先輩も、皆川とは違う方向へ歩いていった。ふたりの先輩がいなくなったことで、みやびはその場にひとりになった。

「わたしも動かなきゃ」

まだ挨拶していない人を探すように、周囲を見回す。できれば、顔見知りの人と初対面の人が混在している輪に入りたい。相手が男性であっても、今度はあまり緊張しないようにと自分に言い聞かせて、ゆっくりフロアを歩き出した。

その時だった。

「藤尾さん」

男性に名前を呼ばれて、みやびの軀はビクッとその場で飛び上がった。呼びかけただけでみやびをこんな風にする相手は、ひとりしかない。

みやびはゆっくり振り返り、そこに立つ大賀見を見上げた。

「お、大賀見……社長」

緊張のあまりどもってしまうが、みやびはすぐに背筋を伸ばした。でも目の前にいるのは、好きな人。彼を見ているだけで、胸の高まりを抑え切れない。

落ちて着いて、今度は失敗しないように——と自分に言い聞かせて、みやびは大賀見を窺った。

視線がぶつかるなり、大賀見はどんな女性をも蕩けさせる極上の笑みを浮かべる。それだけで、みやびの軀に、甘くじりじりとした電流が走った。それに気付きもしない彼は、さらに距離を縮める。

「やあ、こんばんは。ところで、その『社長』は無しだって前に言わなかったかな」

「す、すみません！」

みやびはシドロモドロになりながら謝った。

大賀見は、何故かそう呼ばれるのを好まなかった。モデル業界でそれを知らない人はおらず、彼を『社長』と呼ぶのは、所属モデルたちと、面白がってからかおうとする人たちだけだ。

それをわかっていたはずなのに……

「改めてくれるならそれでいいさ。ところで藤尾さんは……今日も可愛いね」

突然の褒め言葉に、みやびの頬が熱く火照っていく。

大賀見は俗に言う女たらしとは違うが、職業柄か、誰に対しても優しく接する。だから、みやびに言ってくれた言葉も本気にしてはいけなないとわかっているのに、どうしても照れてしまう。

「いえ、わたしなんか別に……。ところであの、……どなたかを探されているんですか？」

「そうなんだ。御社の安土社長が見えないんだけど、どこにいるのか知らない？　もしかして、もう帰られたのかな？」

そう言いながら、大賀見がさりげなくみやびに近づく。それに気付いたみやびは慌てて一歩下がって、距離を取った。

その態度に、大賀見が戸惑ったように笑う。でも彼の醸し出す雰囲気や堂々とした立ち居振る舞いのせいで、本当に困っているとは思えない。

どうしてだろう。大賀見を好きなのに、話しかけられて嬉しいはずなのに、心を覗き込む真つすぐな瞳を向けられただけで、彼の傍から走って逃げたくなる。

「藤尾さん？」

再び声をかけられて、みやびは飛び上がるほどビクッと軀を震わせた。

「あっ、安土ですよ？　確か、ほんの十数分前まではそこにいたんですけど——」

いったいどこへ行ったのかと、薄暗いクラブ内に目を凝らして安土社長を探す。でも、どこにも見当たらなかった。

「すみません。もし急の用件でしたら、わたし……えっ!？」

振り返った瞬間、みやびはびつくりして目を大きく見開いた。お互いの軀が触れ合いそうなほどの距離に、大賀見が立っていたからだ。

あたふたと下がって距離を取るが、恥ずかしさで頬が一気に熱くなる。なんとかして平静を保とうと試みるが、そうすればするほど焦ってしまい、顔から火が出そうだった。

「あのさ、俺ってもしかして……藤尾さんに嫌われてる？」

「えっ？　……き、嫌われ？」

大賀見の言葉に、みやびは何度も瞬きして彼を見上げた。

「だって、そうだろう？　俺が近づけば、君はすぐに離れる。話しかけても心ここにあらずで、まるで早く逃げ出したい……そう態度で言ってるみたいだ」

大賀見は自信に満ちたあの表情を消し、少し寂しそうに口角を下げる。彼は本気でそう思っているようだった。

みやびは狼狽しながらも、違うと頭を振った。

「そんなことないです！　大賀見さんは、その……わたしみたいな他事務所のマネージャーにも気さくに声をかけてくださる優しい方です。そんな人から逃げたいなんて」

「優しい？　男の優しさなんて、どす黒い裏があるのに——」

大賀見が小さな声で呟き、ふっと鼻で笑った。みやびはそんな彼を上目遣いで窺う。するとそれに気付いた大賀見が、居心地悪そうに苦笑した。

「おかしいな。藤尾さんが相手だと調子狂うよ。まるで……あの時みたいだな」

大賀見の声は徐々に小さくなり、最後はほとんど聞き取れなかった。みやびはそんな彼の態度に、たまらず俯いた。

どうして大賀見は、みやびを忘れてしまったのだろう。モデル業界へ入ると告げた時、彼は嬉しそうに、楽しみに待っているよ、と言ってくれたのに。

結局のところ、あれは大賀見の社交辞令だったのだ。

小さくため息を零すみやびの前で、彼も力なく息をついた。

「そろそろ吹っ切らないとな……」

大賀見は一瞬辛そうな表情をする。でもすぐにその色を消し、急にみやびに目を向けた。

「藤尾さん、あの——」

大賀見が何かを言いかけた、その時だった。

「みやびん、……えい！」

女性の声が聞こえたと思ったら、みやびは頭にいきなり何かをかぶせられた。

「キヤー！ な、何!？」

みやびはパニックになりながら、それを振り払おうとする。でも、上からしつかり押さえつけられているせいで逃れられない。

横を見ると、アットモデルプロダクションの女性モデルがいた。

アルコールが適度に入って高揚しているのかもしれないが、この行為は行き過ぎている。

「やめなさい！ わたしが誰と話しているのかわかっているでしょ？ こんな真似……ちよっ！」

みやびが話しかけてもお構いなしに、彼女はキヤッキヤと楽しそうに笑って離れていく。そのまま去っていくかと思いきや、一度立ち止まって振り返り、頭上で手を大きく振った。

「みやびん！ そのウィッグ、とっても似合ってるよ。昔に戻ったみたいで可愛い！」

言いたいことを言うと、彼女は再びモデル仲間たちのグループに戻っていった。

彼女の礼儀のなさに、みやびは力なく小さく頭を振る。そして、かぶせられたロングのウィッグに触れた。

「弊社のモデルが無作法で本当にすみません。きちんと言い聞かせますので——」

謝るみやびの手首を、突然大賀見が強く掴んだ。

「えっ?」

大賀見のその行動に、みやびは顔を上げた。これまで彼に声をかけられたことはあっても、触れられた経験はない。

咄嗟にその手を引こうとするが、大賀見の表情を目の当たりにして動きが止まる。彼は何かに驚いたように目を大きく見開き、その顔は青ざめていた。

みやびの知る彼は、いつも堂々として、朗らかで、誰に対しても優しく、決して激しい感情を表に出さない人物だ。なのに今、目の前にいる彼は、思わずこちらがたじろいでしまうほどの感情を剥き出しにしている。しかも、その瞳の奥には、かすかに怒りに似た炎を滲ませていた。

こんな大賀見は、今まで一度も見ることがない。

怖い！

握られた手をもう一度引くが、彼はさらに強く握ってきた。手首に走る痛みを顔をしかめる。それでも彼の力は容赦ない。

「……っ！ お、……大賀見、さん！」

痛みのせいで声がかすれた。それが効いたのか、彼の力が一瞬緩んだ。その隙にみやびは手を引

き抜き、胸の前で手首を擦る。

「いったい、どうされたんですか？」

みやびがたまらず訊ねると、大賀見は再び乱暴に手を伸ばしてきた。

嘘……な、殴られる!？」

みやびは咄嗟に軀を縮こまらせ、恐怖から逃れるように瞼をギョツと閉じた。なのに、三秒、五秒と経っても一向に痛みはやってこない。

恐る恐る目を開けて、みやびはハツとした。大賀見がみやびの頭にかぶせられたウィッグの毛先をしっかりと掴んでいたからだ。

「な、に……を」

声を震わせるみやびをじつと見ながら、大賀見はそれをゆつくり引つ張った。頭からウィッグがはずれ、みやびの剥き出しの肩と腕を舐めるように滑り落ちる。

「……そういうこと、か。そういうことだったんだな」

感情を押し殺したような低い声音に、みやびの軀は恐怖で震えた。不可解な大賀見の態度に、心臓が不規則なりズムを打つ。胸が痛くなり、だんだん呼吸が荒くなってきた。

このまま大賀見の傍にいてはいけない、早く逃げなければ!

「あの、す、すみません! わたし、用事を……思い出したのでこれで失礼します」

みやびは大賀見の鋭い眼差しから顔を背け、その場を逃げるように駆け出した。

好きなのに、ずっと大賀見だけを想い続けていたのに……

感情を昂ぶらせたままフロアを走り、廊下へ出た。足を止めずエレベーターホールへ行き、ソファを見つけて腰掛けた。

大賀見が追ってくるのではとクラブの方を見るが、彼の姿はない。

「良かった……」

ホツとしたものの、急に態度が変わった彼の行動や表情を思い出すだけで、また手足が震える。

その震えを抑えようとするが、なかなか止まらない。

どうして大賀見はあんな態度を取ったのだろう。ただ、いつも穏やかな彼を苛立たせたのは、みやびなんだとわかった。

何かが彼の気に障ったのなら、今すぐ大賀見に謝るべきだ。でもまだ彼がああ状態なら、彼のもとへ言っても結局また同じことの繰り返しになる。それなら少し時間を置き、ほとぼりが冷めた頃に行った方がいい。

「わたしって、意気地無しだ……」

口に出して自分を戒めるが、やはり出るのはため息ばかり。

手足の震えと早鐘を打つ心臓の鼓動が落ち着いてくると、みやびはソファにぐったりもたれた。

その時、静かな廊下にどこからともなく女性の話し声が響いた。

「うん?」

みやびはその声が気になって立ち上がった。静かに周囲を見回すが、人の姿は見えない。

もしかして、体調の悪い人がいるのだろうか。

みやびは声のした方へ早歩きで向かった。何を言っているのか内容は聞き取れないものの、女性の声は徐々に大きくなってきた。だが廊下の角を曲がったところで、みやびは回れ右をする。その先の階段の途中で、男女が抱き合っていたからだ。

男性は階段の途中で壁に手つき、女性を襲うように上体を倒している。そのまま次のステップへ進むのではと思うほど、男性が女性を熱く求めていた。

キスだって、それ以上だって経験のないみやびにとって、目の前で繰り広げられていた抱擁（ほうよう）シーンは強烈だった。

頭を振って瞼（まぶた）の裏に焼きつくその光景を消そうとするが、薄れるどころかより鮮明になっていく。自然に染まる頬、速くなる鼓動。それらがみやびの思考を鈍らせる。早くこの場を立ち去ろうと思うのに、足が動かない。どうしたらいいのかと、唇を強く引き結んだ。

「ヤダ、ダメだよ……大輔」

突然聞こえた女性の声。その瞬間、みやびの羞恥（しゅうち）は一瞬にして吹き飛んだ。

今の声って……

「……いいだろ？ これぐらい大丈夫だって。なあ、奈々」

男性の声に、みやびは息を呑んだ。勢い良く振り返り、階段で軀（からだ）を寄せる男女のカップルに目を向けた。

最初に見た時、女性は男性の肩に顔を埋めていたのでわからなかったが、今はその横顔がはっきり見て取れる。

やっぱり、みやびが担当しているモデルの奈々だ。

「そのあなた！ 今すぐ奈々から離れなさい！」

アットモデルプロダクションは恋愛禁止。早くふたりを引き離さなければと、みやびは腹の底から声を出した。

「えっ？ み、みやびん!？」

奈々が慌てた様子で男性と離れる。だがその瞬間、男性は足を踏み外したらしく「うわああ！」と声を上げて階段を転げ落ちた。

みやびの頭が、一瞬真っ白になった。

「大輔!」

奈々が急いで階段を駆け下り、動かない男性の傍（そば）に跪（ひざまず）く。声を震わせる奈々を見て、みやびはようやく我に返った。足になんとか力を入れ、ふたりのもとへ駆け出す。

「だ、大丈夫……ですか!」

傍に近寄って初めて、その男性が誰なのかわかった。彼は大賀見モデルエージェンシーに所属している人気急上昇中のモデル、二十三歳の渋沢大輔だ。彼は綺麗な頬に擦り傷を負い、形のいい唇には血を滲（にじ）ませている。そして、鎖骨（さかこつ）に手をあてて呻（うめ）いていた。

「大輔！ ああ、どうしよう……大丈夫!? ねえ、しっかりして!」

「だ、大丈夫、だから……」

苦痛に顔をゆがめながらも、声を震わせている奈々を思いやる渋沢。そんなふたりの傍にいるの

に、みやびは気遣いの言葉すらかけられなかった。歯が音を立てるほどぶつかり、血の気も引いていく。手は、これ以上ないほどふるふる震えていた。

みやびの頭には、早くふたりを引き離すことしかなかった。だから、大きな声を出した。渋沢をこんな目に遭わせたのは、みやびだ。

「みやびん！ どうしよう……大輔を病院へ連れて行かなきゃ」

奈々は潤んだ瞳を向けて、助けを求めてくる。なのに、みやびは何も言えなかった。言葉が喉の奥で詰まり、上手く声を出せない。

みやびは自分を叱咤するように、瞼をギュッと閉じた。

「いったい何をしてるんだ！」

突然聞こえた、男性の低い声。びつくりして、みやびの軀がビクンと跳ねる。

ぎこちない仕草で振り返ると、そこには大賀見が立っていた。彼は一瞬みやびを強い眼差しで射抜くが、すぐに倒れている渋沢へ視線を移す。途端に、彼の眉間に皺が刻まれた。

「……渋沢、か？」

「じゃ、ちよう……」

渋沢が起き上がるようにしたが、奈々が「動いちゃダメ！」と止める。

すると、大賀見は足早にこちらへ近づき、みやびの隣に膝をつく。額に冷や汗を浮かべる渋沢を見て、躊躇せず擦れた頬、切れた唇、そして肩に触れた。

「……っ！」

痛みに呻く渋沢を見ているだけで、みやびの手が再び小刻みに震え始めた。

「打ち身だけならいいが……、これは鎖骨が折れているかもしれない」

「すみ、ません……社長」

渋沢が痛々しそうな声で謝るが、大賀見は彼ではなく、彼の傍にいるふたりを交互に見る。そしてその視線が、青ざめるみやびの上でしばらく止まった。

「渋沢、君の今後の撮影スケジュールは？」

大賀見は渋沢に訊きながらも、みやびから視線を逸らそうとしない。みやびの反応を見て、どういう状況でこういうことが起こったのか探っているようだ。

「わかっている範囲でいい。特に直近のスケジュールが知りたい」

大賀見の言葉に、みやびは生唾をゴクリと呑み込み、手を強く握った。

手帳を開いて確認しなくてもわかる。来週、巨大娯楽施設スパリゾートで広告スチール撮りが行われる。それは奈々が参加する仕事だ。そして、奈々の友達以上恋人未満の役を演じる相手が、渋沢となっていた。

でも、きつと渋沢は撮影に参加できないだろう。一週間やそこらで彼の傷が治るとは到底思えない。

この仕事が決まった時、奈々は、彼の相手役を務められると喜んでいたので。

みやびが奈々を窺うと、彼女は気丈に涙を堪えて、渋沢に手を貸していた。

「お、俺は——」

上体を起こした渋沢は、声を絞り出そうとした。しかし大賀見が頭を振って、彼の言葉を遮る。
 「悪い、仕事より病院へ行くのが先だな。西塚さん、渋沢に付き添ってくれないかな？ 本当なら俺か、もしくはうちのスタッフが連れて行くべきなんだが」

「大丈夫です、あたしが付き添います！」

奈々がはつきりそう答えると、大賀見は携帯を取り出し電話をかけた。

「タクシーを一台お願いします。場所は六本木の——」

クラブの住所を、続いてこの場所から一番近い救急病院へ向かってほしいと告げて通話を切った。

「すぐに来てくれるそうさ。下まで俺も手伝おう」

「いえ、ひとりで大丈夫です。もともと、あたしがここまで……いえ、なんでもありません」

奈々は激しく頭を振り、「大輔、あたしの肩に掴まって」と言った。

渋沢は時々よろけそうになりながら、ゆっくりと歩いていく。奈々はそんな彼の腰に腕を回し、

エレベーターホールへ向かった。

「……奈々、わ、わたしも」

みやびも手を貸そうとした。だが、伸ばしたその手を大賀見に掴まれる。

「藤尾さんは、まず俺と話をしよう」

「は、はな……し？」

みやびは呆然と大賀見の言葉を繰り返した。でも彼は気にせず、奈々と渋沢の姿が消えるなり、近くにあるソファへみやびを誘った。促されるままそこに座ると、彼も隣に腰を下ろした。

「何があったのかは訊かない。渋沢と西塚さんの様子を見ていたら、だいたい予想はつくし。ところで仕事の話だけど、渋沢と西塚さん、近々……同じ仕事が入っていないかったかな」

大賀見が目だけを動かしてみやびを見る。そこには、誰かを責める色は一切ない。それがまた辛く、みやびは唇を強く引き結んでうな垂れた。

「はい……。来週、スパリゾートで広告のスチール撮影が入っています」

そこでみやびはまだ大賀見に謝っていないのを思い出し、隣に座る彼に目を向けた。

「渋沢さんに怪我をさせてしまい、本当に申し訳ありません！ 怪我の状態によっては、仕事をキャンセルしなければなりませんよね？ そんなことになったら——」

声が震えて、その先を続けられなくなる。自分のせいで皆に迷惑をかけてしまったと実感すればするほど感情が昂ぶり、涙が込み上げてきた。

泣くなんて最低だ。泣くよりも前に、するべきことがいろいろあるのに……

このまま逃げてはダメ！——みやびは、そう自分に言い聞かせた。手の甲で零れ落ちそうな涙を乱暴に拭い、きちんと話せるまで気持ちを落ち着けようとする。

そんなみやびの肩を、大賀見が突然抱いてきた。前触れもなく触れられたせいで嗚咽は一瞬に止まるが、それとはまた別のパニックが込み上げてくる。

「あ、あのー」

手をどけてほしいと懇願するつもりで顔を上げて、みやびは言いかけた言葉を呑み込んだ。そこに、驚くほど真剣にみやびを見つめる大賀見の瞳があったせいだ。

触れられている肩と首筋が熱を帯びる。心臓が早鐘を打ち、送り出された血液が軀中を駆け巡って体温が上昇していく。

みやびが動揺しているとわかつているはずなのに、大賀見は顔色を一切変えない。それどころか、まるで観察するようにみやびを見つめる。それだけで、みやびの心に戸惑いと緊張が入り乱れ、唇がかすかに震え始めた。すると、彼の視線がそこに落ちた。

これ以上はもう耐えられない！

その時、大賀見はみやびに触れていた手をさりげなく退けた。

「あの仕事は、渋沢にはいい経験になると思っ受けてさせたが。まさか……自分で自分の首を絞めるとは」

大賀見がボソツと呟いた。その口調は淡々としていたが、みやびはきつく咎められた気がした。

「……ヤバイな。俺が動くしかないか」

大賀見は上体を前に倒すと膝に肘を載せ、難しそうな顔をして絨毯の一点をじっと見つめる。強く引き結んだ唇、双眸に冷たい光を宿す細められた目、そして手の甲に浮かんだ筋。

それを目にし、みやびは自分が大変なことをしてかしてしまったのだと再認識した。

みやびは膝の上に置いた手を強く握り、まぶたをギョツと閉じた。

「ごめんなさい」と言うだけではダメだ。謝る以外に、みやび自身が何かをしなければ。

そこまで考えてから、みやびは心の中で激しく頭を振った。

一介のマネージャーにできることなんてたかが知れている。大賀見の事務所での補助や、使い走

りぐらいしか思いつかない。だが、そんなことでも彼の役に立つなら手伝いたかった。

みやびは思いを込めて、大賀見の顔をじっと見つめた。

「大賀見さん。あの、わ……わたしにできることならなんでもします！」

「……はあ？」

大賀見が素つ頓狂な声を上げた。

「わたしが何かする程度では、お詫びにはならないとわかつてます。でも、大賀見さんのお役に立ちたい。だから、なんでも言うってください。わたしにできるならなんでも……本当になんでもしたいと思ってるんです」

みやびは頭を下げ、嘘偽りのない気持ちを伝えた。でも、大賀見は一言も発しない。

みやびなんか彼の役に立つわけがないと思っっているのだろう。だがたとえそうだとしても、今の自分にできるのはこれしかなかった。

「本当に……なんでもします。大賀見さんのしてほしいことを言っってください！」

さらに深く頭を下げる。

「……へえ、なんでもするね」

突然頭上から降ってきた、大賀見の低い声。これを耳にするのは二度目だった。一度目は彼がみやびの頭にかぶせられたウィッグを引っ張った時、そして二度目が今だ。

何かがおかしい……

また大賀見の機嫌を損ねてしまったのかと、彼をそつと窺う。でも思っただほど怒っているように

は見えない。みやびはホッと安堵した。

「はい、なんでもします。わたしは大賀見さんのお手伝いをさせてください！ 事務所が違うので、いろいろと問題があるかもしれませんけど——」

「じゃ、俺の恋人に……いや、俺の恋人を演じてくれる？」

ええ、もちろん！——と頷こうとしたところで、みやびの思考がピタッと止まる。

「……えっ？ こ、恋人？ わたしが、ですか？」

「ああ、もちろん。ここには君しかいないのに、いったい誰に頼むと言うんだい？」

「だ、だって……わたしが……恋人？」

呆然と受け答えしていたが、徐々に「恋人」という単語が頭の中に浸透していく。それがどういう意味なのかかわかると、一瞬にしてみやびの顔が真っ赤になった。

「ダメ……、わたしにはできません！」

絶対に無理だ。男性と付き合った経験のないみやびに、そんなことできるわけない。

それに、どうして彼はそんなことを頼むのだろう。渋谷の件で大賀見を手伝いたいという流れで話をしていたはずなのに、彼が急に話をすり替えたのも理解できなかった。

みやびは唇を歯で噛み、全てを拒むように激しく頭を振った。

「そんなの、絶対にダメです！」

「絶対に、ダメ……ね。結局、なんでもする。って言ったのは、口先だけってことか」

みやびを嘲るように、大賀見が鼻で笑う。それを耳にした途端、みやびは気付いた。

大賀見は、別に話をすり替えたわけではないのだ。彼はみやびにして欲しいことを、ただ口にしただけだ。

みやびは、膝の上に置いた手に視線を落とした。

大賀見の望む恋人を自分が演じられるとは到底思えない。でもそれが彼の望みなら、みやびはその気持ちに応えるべきだろう。彼に「なんでもする」と言ったのは、その場しのぎの嘘ではなく心からの言葉だから。

緊張のあまり、口の中がからからになるのを感じる。それでも、みやびは今、誠意を見せなければならぬ。

覚悟を決めると、みやびは何度も生唾を呑み込みながら顔を上げた。

「あ、の……大賀見さん」

大賀見が、ゆっくりみやびに顔を向ける。

「うん？ 何？」

「わたしなんかで務まるのか……わからないですけど、大賀見さんの助けになるのなら、わたし頑張ります」

「……つまり？」

大賀見は大げさに片眉を上げて見せ、続きを求める。彼の意地悪な訊き返し方に、みやびの喉の奥がうっとうしかった。

返事の意味をわかっていてそんな風に言うなんてひどい。だけど、こういう展開になったのは自

分のせいだと思い直し、もう一度彼と向き合う。

「わたし、大賀見さんの恋人……役を引き受けます」

そう言った瞬間、大賀見が満足げに口元を緩めた。その笑みに、みやびの心臓がドキッとする。

「藤尾さんなら、必ずそう言ってくれると思ったよ」

その心を蕩げさせる艶っぽい笑顔を見ていられず、みやびは慌てて顔を背けた。そして恥ずかしさのあまり目を伏せる。

「で、でも……大賀見さんは、本当にいいんですか？」

「何が？」

「何がって——」

みやびは思わず顔を上げ、大賀見と目を合わせてしまった。

何か問題か？——そう言いたげな様子で、大賀見はじっと見つめてくる。みやびはその眼差しにどぎまぎした。

「あの……正直、わたしなんかでは大賀見さんの恋人役は務まらないと思っっています。大賀見さんの隣に立てるような美女でもありませんし。なので、もしわたしにできる事務作業とかがあれば、そちらのお手伝いをできればと——」

「そういう藤尾さんがいいんだ。それに自信なんて必要ない。ただ俺の傍にいて、俺の恋人……として隣に立ってくればそれでいい」

みやびの言葉を、大賀見は一蹴する。

「ですが、わたしなんて、とても大賀見さんに相応しいとは——」

「へえ。藤尾さんは相応しいとか相応しくないとか、そういう基準で人と付き合うんだ？ 確かに俺たちは特に外見を重視する世界にいる。だからといって、俺はそれがその人の全てだとは思わない。俺はそれを知ってるから……他の誰でもない、君がいいと言ってるんだ」

みやびに向けられた、迷いのない真つすぐな言葉と眼差し。

大賀見はどうやら言葉を撤回する気はないみたいだ。それならば、もう腹をくくろう。

みやびは膝の上に置いた手にそっと目線を落とし、覚悟を決めるようにギュッと強く握った。

「それじゃ、俺の恋人役よろしく」

俯いていたみやびの目に、差し出された大賀見の手が映った。

「あっ！」

「……何が？」

「いえ、なんでもありません」

慌てて頭を振り、恐る恐る手を差し出して大賀見と握手した。彼の武骨な手に包まれ、強い力で握られる。

大賀見は覚えていないだろう。かつて、大学四年生だったみやびと握手し、この業界に入ってくるのを待っているよ」と言ったことを。

みやびは力のない笑みを浮かべ、彼の手の中から自分の手を引いた。

大賀見が、腕時計に目を落とす。

「……そろそろ、動かないとな。俺はこのままパーティを抜けさせてもらおうよ」
「えっ?」

ソファから立ち上がった大賀見が、みやびを見下ろしながら頷く。

「渋沢はおそらく、スパリゾートの撮影は無理だろう。代理店側にキャンセルを申し出るにしても、それだけではうちのイメージダウンは必死だ。そうならないためにも、代役を探さないとね」

その言葉で、みやびは現実に戻された。渋沢の痛みに呻く顔が脳裏に浮かび、再び手が震える。

みやびの動揺を目にした大賀見が、口元をほころばせる。

「そんなに心配しなくていい。俺にも考えがあるから」

大賀見はそう言うなりポケットに手を突っ込み、みやびに背を向けて歩き出した。

「あの! ……考えて、なんですか?」

みやびはソファから立ち上がり、彼に声をかけた。数歩進んだところで大賀見は立ち止まり、ゆっくり振り返る。

「もちろん渋沢の代役だよ。渋沢に引けを取らない、いや……彼以上のネームバリューを持つモデルを用意し、それで先方を納得させる。ただ残念ながら弊社に彼以上のモデルはいない。そして申し訳ないが、藤尾さんの事務所にも渋沢を越えるモデルはいない」

みやびは唇を震わせながらも「わかっていきます」と答えた。

「つまり、別事務所のモデルに頼むことになる。ただ人気モデルはスケジュールが詰まっっていて、代役を頼んでも無理な場合がある。だから時間との勝負なんだけど、今回はあまりにも時間がなさ

過ぎる。少し……難しいかもしれない」

そう言い終わった時、かすかに大賀見の唇が引き結ばれ、何か考えるように目が細められた。さつきはみやびを安心させるために微笑んでくれたが、今の渋い顔が本当の心情だろう。

そんな彼を、みやびはただ見ていることしかできない。それが歯がゆかった。

「……わたしにできることがあればなんでも言ってください。お手伝いさせていただきますので」

「手伝う? ああ。それなら渋沢の件を頼んでいいかな? 西塚さんと連絡を取って、彼の怪我の状態を教えてほしい。あいつきつと……社長の俺には言い辛いと思うから間に入ってほしいんだ」
「わかりました!」

力強く頷くみやびに、大賀見が急にふっと笑う。甘い笑みに戸惑い、どこかへ消えていた彼に対する緊張が込み上げてきた。頬が火照る。そこを手の甲で冷ましながら、視線を彷徨させた。

「あの……あまり、そんな風に見ないでください」

これ以上舞い上がってしまったようにと気を付けているのに、大賀見はお構いなしに色っぽい声を漏らして笑った。

今までに感じたことのない疼きが背筋を這い、それがさらにみやびの軀を熱くさせる。

「悪かったね。だけど、そんな状態では俺の恋人は務まらないな」

「えっ?」

大賀見の言葉の意味がわからず、つい訊き返したみやびに、彼は苦笑いした。だが何も言わず、再び腕時計に視線を落とす。

「……悪い。本当にそろそろ事務所へ戻るよ」

「あっ、はい！」

それから大賀見はみやびには目もくれず、背を向けて歩き出した。そんな彼をエレベーターホールまで見送るために、急いであとを追う。

目に入る広い背中、ランウェイにいるみたいにしなやかな足取り、そして廊下の角を曲がった時に見えた凛とした横顔。全てにおいてパーフェクトな大賀見を、みやびはうっとり見つめ続けた。こんな風に目を奪われるのは、みやびだけではない。みやびの知る限り、この業界で働く人の中にも彼の目に映りたい、隣に並びたいと思う女性はたくさんいる。それほど大賀見は女性にモテていた。

そんなことを考えていたせいか、突然疑問が湧いた。

何故大賀見は恋人役を必要としているのだろうか。みやびに頼まなくても、彼が指を鳴らせば美女が寄ってくるのに……

小首を傾げた瞬間、大賀見が立ち止まって振り返った。

「藤尾さん。それじゃ、洪沢の怪我の状況がわかったら俺に連絡してくれ。いいね？」

「はい！」

不意に声をかけられ、動揺のあまり大きな声で返事をしてしまった。

「何時になっても構わない。たぶん今夜は……遅くまで事務所に残って対応しなければならぬと思うから。できれば仕事用の番号ではなく、俺専用の……プライベートの番号へ連絡してくれないか？」

「はい、わかりました」

「プライベートの、ですか？」

「ああ」

「はい、わかりました」

頷くみやびに、大賀見が苦笑した。そして「やっぱりな……」という小声の呟きが耳に入った。

何？——と訊ねようとしたが、その前にエレベーターの扉が開いた。そして大賀見はひとりですれに乗り込み、行ってしまった。

大賀見の姿が消えてひとりになると、みやびは軀の力をゆっくり抜いた。

「まずは、奈々に電話をするところから始めなきゃね」

みやびはクラッチバッグを開けて携帯を取り出すが、そこでふとエレベーターに視線を戻した。

大賀見は電話をしてくれと言った。でも、事務所で夜遅くまで頑張ると言ってくれた彼に対し、本当に電話で連絡するだけでいいのだろうか。

みやびはその場で激しく頭を振る。

それでいいはずがない。みやびはみやびなりに、誠意を示すべきだ。

クラブの入り口に向かつて歩き出しながら、奈々に電話をかけた。

コール音が鳴り響く。しかし十コールほど鳴っても、その音は止まない。かけ直そうと思った時、回線の切り変わる音が聞こえた。

「奈々？」

『……みやびん、今診察が終わったんだけど、大輔……やつぱり鎖骨骨折してるって』
奈々の嗚咽まじりの声が聞こえる。

「わかったわ。怪我の件については、わたしから大賀見さんに連絡を入れるね。渋沢さんには、今日は何も考えず、からだ軀を休めるように言っておいて」

『うん、わかった。ごめんね……、本当にごめんね、みやびん』

どうして奈々が謝るのだろう。謝るべきなのはみやびなのに……

「奈々も、今日はもう家に戻って、ね」

みやびは事故のことはもう口にせず、通話を切った。

本当は、すぐにでも大賀見の事務所へ走り出したかった。でもおそらく彼のやるべきことは山積みで、今あとを追ったとしても迷惑なだけだろう。ここはまずパーティに戻り、自分の仕事を終わらせてから動くべきだ。

みやびはやるべきことを頭の中で整理すると、ドアを開けて音楽の鳴り響くクラブに入った。

二

——二時間後。

デスクのライトだけを灯した薄暗い社長室で、大賀見一哉は椅子に座っていた。

渋沢の件は、彼のマネージャーに指示をした。詳しい話は、明日事務所だと伝えている。

そして一哉はというと、自分にしかできないことに取り組んでいた。コッソコッソと指でデスクを叩いては、受話器の向こうから聞こえる、相手ののらりくらりとした捉えどころのない話に相槌あいつちを打つ。

「……吉住社長」

本当はこの相手には頭を下げたくない。でも彼に頼むことで、藤尾みやびの歡心を買えるのならと腹をくくった。そう思うほど、一哉の心には余裕がなかった。

この約四年、一哉は彼女を探し続けていた。だが彼女はその間に外見を変え、何食わぬ顔をして一哉の前に立っていたとは。

みやびは、この先も真実を話そうとはしないだろう。数時間前、大声で一哉をタイプではないと言いつ放った彼女が、自分から接点を持つとするはずがない。

向こうが来なければ、こちらから先手を打つしかない。

一哉は奥歯を噛み締め、漏れそうになる怒りを堪える。そして受話器をしつかり耳に押し当てた。

「……吉住社長、そろそろ要点をまとめてもいいでしょうか？」

『おいおい、私を諷めるような声を発しないでくれ。別にいいじゃないか、一哉の方から頭を下げてくるなんて久しぶりなんだし。ただ、クラブで顔を合わせた時に言っただけだったけどね』

嫌味っただししい言い方に、受話器を持つ手に力が入る。だがその件については触れず、さっさと話を進める。

「それでは御社のモデル、豊永孝宏を推薦してよろしいんですね？」

『もちろん、いいに決まってる！一哉の頼みを私が断るとでも？うちに所属していた十五歳から二十七歳までの間、ずっとお前を可愛がってきたんだ。だから一哉のことは、なんでも覚えていよ。何と引き換えに独立したのかもね』

また嫌な言い方をする。一瞬苛立つがすぐに感情を抑え込み、わざと笑みを零す。

「吉住社長にいただいた恩を忘れてはいけません。少しずつですが、それをお返しできるようこれからも頑張りますよ。もちろんどこへも行かず、この自分の事務所で……ですが」

吉住社長が、一哉の強気な言葉に大声で笑う。続いて、受話器の向こう側から、クラクションにまじって「どうされました？」と問いかける男性の声が聞こえた。

パーテイ後、車でどこかへ移動中なのだろう。

「近々御社に伺います。でもまずは、先方に豊永の名を出して話を進めさせていただきます。時間がないのでお許し願えればと」

『わかっている、わかっている。そういう風に動けど、私が一哉に教えたんだ。まっ、頑張りなさい。』

一哉が成功の道を進んでいるのは私も嬉しいからね。……未来を考えると』

「それではこれで失礼します」

吉住社長の高笑いが聞こえたが、一哉は一方的に通話を切った。

「あの……狸め！」

イラッとした感情が言葉となって出た。一哉は乱暴に椅子にもたれ、一度ため息をついてから、

音を立てて椅子を回転させた。

三階建ての窓から見える景色は、客観的にいえばそれほど良いものではない。それでも自分で築き上げた城から眺めるイルミネーションは、格別だった。

しばらく外に目をやっていたが、やがて一哉はデスクに置いたプライベート用の携帯電話へちらつと視線を移した。

「これで渋沢の一件は片付いた」

モデルの交代を言い出せば、当然広告代理店側はいい顔をしないだろう。ただ、豊永への代替案は快く受け入れてもらえると考えられる。一哉が事前に得ていた情報では、もともと広告代理店側は、俳優としても名前を知られる二十五歳の豊永を起用したがっていたからだ。

だが彼はオーディションを受けなかった。そのため、次点候補の渋沢が繰り上がったと聞いている。つまり、この仕事は本命に戻ることになるのだ。

渋沢にしてみれば残念な結果だが、乗り越えてもらうしかない。何があっても顔だけは守らなければならぬと知っているのに、彼はそれを怠った。怪我を負った理由など、この世界では一切関係ない。渋沢は甘かった、ただその一点に尽きる。

そんなこと、みやびも知っているはずだ。なのに彼女は自分のせいだと自らを責め、そして一哉に言われるまま恋人役を引き受けた。

本当は恋人なんて全く必要ないのに、みやびは一哉の嘘に見事引っ掛かってくれた。

「……まあ、彼女はそういう人だからな」

誰かのためなら、自分を犠牲にしても懸命に動く。だから一哉は、どの美女よりも彼女に興味を持った。

みやびと初めて言葉を交わしたのは約四年前。たった数分の会話だったが、それだけあれば彼女の魅力を知るには十分だった。

「四年、か。長かったな……」

一哉は足を組み、そつと目を閉じた。

* * *

——四年前。

二十七歳の時、一哉はこれまで世話になった吉住モデルプロモーションを辞め、一月付けで独立を果たした。とは言っても、すぐに独立を許されたわけではなかった。吉住社長は一哉に目をかけていて、そう簡単には手放してもらえなかった。

独立して十ヶ月ほど経ち、所属モデルをひとり、ふたりと抱えられるようになってもお、彼は一哉を気にかけて、頻繁に仕事を回していていた。

この日もそうだった。吉住社長から紹介された仕事で、相藍女子学院大学のミスキャンパスコンテストの特別審査員をするため、一哉は車を走らせていた。

吉住社長との付き合いは、一哉が高校生になって吉住モデルプロモーションに雑用のバイトで

入った時からだ。もともと裏方だったはずが、モデル並みに身長が高く、また物怖じしない性格で気に入られ、彼の一声でモデルの道に進むことになったのだ。

吉住社長の引き立てもあり、一哉はモデル業界で成功を収めるが、正直経営の方に興味があった。そのため、大学を卒業すると同時にきっぱりモデルを辞め、事務所で経営の勉強をさせてもらうことにした。ただ、いくら経営の勉強をしてもこのままでは自分のしたい仕事ができないと気付き、それで独立を希望したのだ。

最初こそ首を縦に振ってくれなかったが、話し合ううち条件付きで独立を許された。

その条件とは、『将来吉住社長の愛娘と結婚し、吉住モデルプロモーションを継ぐ』というものだった。

もちろん安易にそれを呑むわけにはいかない。

一哉はこの条件に対して、ひとつ制約を提示した。現在アメリカへ留学中の吉住社長の娘が日本へ帰国した際、どちらにも恋人がいなければ社長の望むとおりにする、と。

「社長なりの譲歩か、それとも……俺が女に真剣にならないと知って受け入れたのか」

どちらにしろ、吉住社長には相当気に入られていたということだろう。

もちろん恩義を抱いてはいる。だが、それと自分の結婚は別問題だった。これ以上吉住社長に恩を重ねるのは得策ではない。今後は極力、自分から何かを求めない方がいいだろう。

もたえるものは、有り難くいただくが——と心に浮かぶ本音に苦笑した時、一哉の視界に相藍女子学院大学が入った。

モデルを引退して六年も経つのにICHIYAの名で仕事するのは、今更な感は否めない。でも逆に、そこへ行けば新しい人材を発掘できるかもしれないという期待もあった。

一哉は特別パスを警備員に提示して大学内に入り、駐車場に車を停める。

朝夕はめつきり冷え込むようになってきたが、この日の空は深く澄み渡った秋晴れで、穏やかな陽射しが降り注いでいた。まさしく文化祭日和だ。

「大賀見さん！」

その声に振り向くと、一哉に向かって走ってくる女性が目に入った。

「本日は、どうもありがとうございます！」

出迎えてくれたのは、何度か打ち合わせで顔を合わせた相藍女子学院大学のミスキャンパス実行委員長だった。駐車場へ車を入れてすぐに彼女が現れたということは、あの特別パスで警備員から連絡がいくよう手配していたに違いない。

「こちらこそお招きありがとうございます」

一哉は、笑顔の可愛い実行委員長に微笑んだ。

「コンテストの流れは事前にお渡しした台本どおりで、変更はありません。コンテスト終了後の総評も大賀見さんをお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします」

「あのお、本当に俺でいいの？ 君たちの世代には、俺なんて記憶に残ってないと思うけど」

実行委員長は、驚きの表情を浮かべた。だがすぐに、頭を振る。

「そんなことないです！ 今回、ICHIYAの大賀見さんが特別審査委員で参加すると発表した

途端、大学内では凄いことになったんですよ」

必死に力説してくれる彼女に、一哉は頬を緩めた。

「どうもありがとう。ICHIYAの俺を覚えてくれてるのは嬉しいけど、今回の主役はミスキャンパス候補たちだからね。今回は審査員に徹するよ」

「はい、それはもちろんです！ では、控え室へご案内しますね」

一哉は実行委員長の案内を受け、会場に隣接した控え室に入る。開始の時間が迫っていたため、荷物を置くと実行委員と一緒に特設会場へ移動した。

会場内は満員で、投票権を持つ一般参加者と学生たちは盛り上がっていた。既にノリによって会場がひとつになっている。

ただ、審査員はそれに吞まれてはいけない。

ミスキャンパスコンテストの開始宣言後、一哉は表情を引き締め、意識を最終選考に残った十五人に集中させた。審査員の見方は人それぞれだが、一哉は先入観を持たないよう、ミスキャンパス候補の資料には一切目を通していない。

そのため、舞台に出てくるミスキャンパス候補を見ては手元の資料に目を落とす行為を繰り返す。一哉が一番大事にしているのは、初めてその人を目にした瞬間にインスピレーションが湧くかどうかだった。

緊張していて顔が強張るのは仕方ない。でも目を奪われてしまう何かがある人ほど、その道で成功する人が多い。経験上それをわかっているから、一哉はその一点を注視していた。

なのに、その集中力がだんだん散漫になってきた。少し前から一哉の視界にちらちら入ってくる、ジャージ姿の髪の長い女性が原因だ。

舞台袖にいる彼女は、実行委員のひとりだとわかる。彼女はランウェイに向かう候補者ひとりひとりに声をかけ、その強張った顔に自然の笑みを戻させていた。そして舞台の袖に到着すると泣き出す候補者を、柔らかな笑顔で迎え入れる。彼女に声をかけられて肩の力を抜いた候補者は、涙を零しても最後は笑みを浮かべて奥へ下がっていった。

いったいあの女性は、どうやって候補者たちの心を軽くしているのだろうか。
知りたい……、彼女と直に話してみたい。

一哉は突然湧いた自分の感情に驚いた。独立して以降、女性を目にしてもモデルとして通用するかしないか、その基準でしか見ていなかった。

なのに今、久しぶりに感じた女性に対する好奇心と欲望で、胸がドキドキしている。

だが一哉は、すぐに彼女から候補者へ視線を戻した。

別に急がなくてもいい、コンテストが終われば彼女と話ができる——そう自分に言い聞かせ、今やるべきことに集中した。

候補者たちのウォーキング、特技披露、そしてスピーチと、順調に進んでいく。全ての審査が終わり、投票が始まった。一哉は自分の直感で票を投じ、それを実行委員に渡した。

発表を待つ間、一哉は他の審査員たちと談笑していたが、数十分経った頃に集計を終えた実行委員たちが戻ってきた。

実行委員の指示で、一哉は他の審査員の学長や学部長、そして学生自治会会長たちと一緒に登壇する。すると、実行委員長が白い封筒を持って現れた。マイクを握り、場内をぐるっと見回す。

「大変お待たせいたしました。これより賞に選ばれた三名を発表したいと思います」

実行委員長からマイクを渡された学生自治会会長が、審査員特別賞、準ミスキャンパスと発表する。前者は一哉の希望が通り、後者は会場を沸かせた学生が選ばれた。

「さあ、栄えるミスキャンパスに選ばれたのは——」

シーンと静まり返った会場内に学生の名が発表されると、一斉に歓声が沸き起こった。

正直、一哉にはあまり魅力的に映らなかったが、それでも笑顔でミスキャンパスに拍手を送った。もちろん最終選考に残るだけあって、美人の部類には入る。だがどの仕草もわざとらしく、また媚の色が濃過ぎた。一部には支持されるかもしれないが、万人受けするモデルにはなれないだろう。そう思ったから、一哉は彼女に票を入れなかった。とはいえ、ミスキャンパスは審査員の票だけで決まるものではない。

一哉は心の中で残念な気持ちを抱きながら、ミスキャンパスの傍へ歩いていった。実行委員からファー付きコートを受け取り、彼女の肩の上にかける。続いて、ライトに反射して煌めくティアラを彼女の頭上に載せた。

「ミスキャンパス、おめでとう」

「ありがとうございます！」

一哉は彼女を称えるために軽く抱擁を交わすが、その時いきなり「このあと、わたしのために時

間を作っていただけませんか？」と囁かれた。

マイクが声を拾わないとはいえ、ここは舞台上。あまりの大胆さに度肝を抜かれるが、そこは一哉もプロ。彼女の言葉には一切反応せず、ただ笑顔を張り付けて、抱擁を解いた。

ミスキャンパスは満面の笑みを浮かべていたが、一哉の目に宿る冷たい光を見て、その表情が崩れた。

舞台上で声をかけるしたたかさは、彼女の強みになるかもしれない。だが、それを嫌う者もいる。一哉は返事すらず、さつさと他の審査員のもとへ戻った。

「それでは、特別審査員を務めてくださった大賀見一哉さんに一言いただきたいと思います」
実行委員長からマイクを受け取った一哉は、舞台上立つ全員に目を向けた。

「最終選考に残られた十五人全員に、まずはおめでとうと言わせていただきます——」

一哉は、祝いの言葉で始めた。十二人は賞を得られなかったとはいえ、そのパフォーマンスは素晴らしいと称賛する。そして賞を獲得した人たちに対しては、あえて驕るなかれと辛口のコメントをした。

もともとはそうするつもりはなかったが、先程のミスキャンパスの振る舞いは、この先彼女のためにはならないと判断したためだ。また、他の受賞者にも肝に銘じてほしいと思った結果のコメントでもある。

会場は一瞬静まり返ったが、最後にもう一度全員を祝福する言葉で締めくくると、拍手が起こり、コンテストは無事に幕を下ろした。

「申し訳ありません。祝いの言葉を述べるだけで良かったんですが、できませんでした」
裏に下がってすぐに、一哉は六十代の学長の傍へ行き、彼に謝った。

「いやいや、もつと言ってほしかったぐらいですよ。彼女たちはこれから社会へ出ていく。このコンテストを機に芸能界へ進みたいと望む者もいるでしょう。その業界にいる大賀見さんの言葉だからこそ、彼女たちも真剣に受け止めたと思いますよ。今日はどうもありがとうございました」

「いえ、こちらこそ呼びいただきありがとうございます」
一哉は学長が差し出した手を取り、力強く握手した。

「もし今回のミスキャンパスコンテストに参加した学生がモデル業界へ進みましたら、その時はどうぞよろしく願います」

最後に学生の先行きに心を配る学長と挨拶して別れると、代わって実行委員長が駆け寄ってきた。口を開きかけた彼女を、一哉は軽く手を上げて制する。

「悪い。少し時間をくれないかな」

実行委員長の「わかりました」という返事を聞くなり、一哉はすぐに周囲を見回した。ミスキャンパス候補者たちの緊張をほぐしては笑顔をもたらしていた、あの女性を探すために。

だが、どこにも見当たらない。

急いで舞台裏に回り、ジャージ姿の彼女を探す。でもそこにいるのは、最終選考に残った十五人と実行委員たちだった。声をかけてもらえないのではないかとでも思っているのか、ちらちらと流し目を送られるものの、一哉はそれを無視する。

「おい……いったいどこに消えた？」

一哉は再び舞台上に行き、一般席に目をやる。既に客の退場したそこは閑散かんとんとして、誰もいない。彼女は、ミスキャンパスコンテストの実行委員のひとりのはず。コンテストが終わってそれほど時間が経っていないので、まだ会場内にいると踏んでいたが、彼女の姿を見つけられずにいた。

「……クソッ！」

苛立たしさを口に出したその時だった。誰もいないはずの客席から、急に黒い頭が現れた。ハツとした瞬間、黒くて長い髪をポニーテールにしたジャージ姿の女性が立ち上がった。

「見つけた！」

一哉は舞台を飛び降りるとすぐに走り出し、下ばかり見ている彼女に近づいた。

「君！」

「えっ？」

ジャージ姿の女性がビクッと軀からだを震わせて顔を上げ、一哉に目を向けた。

一瞬にしてふたりの視線が絡まり合う。

滅多に動じない一哉だが、彼女の澄んだ瞳が自分を見てるとわかった途端、心臓がドキンと高鳴り、軀の芯が震えた。それだけではない。ひとりで会場の掃除をする真面目な性格に、今までしてきたどの女性とも違うと好奇心がさらに増す。

なのに、一哉は彼女の姿にぶっと噴き出してしまった。

「い、ごめん……」

顔を見た途端笑うなんて失礼なのは承知している。だが、笑いが止まらなかった。

ゴミの入ったビニール袋を手を持つ彼女の顔が黒く汚れ、綺麗な黒髪に大きな埃ほこりをつけているせいもある。だが笑いが込み上げてしまった真の理由は、実行委員の彼女が後片付けもせず会場をあとにするような人物だと、一瞬でも思った自分に呆れたせいだ。

彼女は、そういう女性ではないと直感でわかっていたはずなのに……

「あの……えっと？」

恥ずかしそうに頬をピンク色に染めながらも、一哉の目を覗き込む彼女。故意にする上目遣いとは違う純粹なその眼差しに、自然と引き寄せられる。こんな女性を見るのは久しぶりだった。

「笑って悪かったね」

一哉は笑いを引つ込めるが、口元は弧を描いたまま彼女のノーメイクの顔をじっと見た。化粧っけが無いせいか、幼く見える。下手したら高校生でも通じそうだ。

「いえ。それで……その、わたしに何か用でしょうか？」

「君の仕事ぶり、見ていたよ」

「えっ？」

彼女が一哉を見上げる。そのキスを望むような顎の上げ方に欲望を刺激された一哉は、思わず手を出して彼女の頬に触れた。

彼女はまたビクッと軀を震わせ、大きな目をより一層見開いて一哉を見つめる。その表情を見て、一哉は自分が何をしようとしていたのか気付き、息を呑んだ。

初対面の女性に、いったい何をしているのだろう。

一哉は、自分に触れられて頬を染める彼女を見下ろした。

彼女はまるでウサギのように一哉をじっと見て、次の行動を待っている。一哉は彼女の無垢な瞳を見ているだけでオオカミになりそうだ。こんな衝動に駆られるなんて自分らしくない。なのに、一哉を惹きつける彼女の魅力に逆らえなかった。

「あの、わたし……」

その言葉で一哉は湧き起こった感情を堪え、そっと指を動かして彼女の頬の汚れを拭った。

「頬、汚れてる。一生懸命ゴミ拾いしているせいかな」

「え？ あつ……す、すみません！」

彼女は一哉の手を避けるように顔を伏せ、一歩後ろへ下がった。汚れを取ろうと急いで頬を拭うが、一哉を気にしているのか、何度もこちらを窺ってくる。

その計算のない彼女の仕草に、一哉はさらに心を動かされた。

直感だった。彼女は一哉の周囲にいる、媚を売る女性たちとは違う。

一哉は、彼女との距離を縮めたくなった。さらにその先へ進み、自分の手で彼女の初心な表情が女の顔へ変わるその瞬間を見たいとさえ思った。

それほど一哉の心は、彼女のことではいっばいになっていた。

仕事中心の生活を送っていた一哉にとつて、久しぶりに味わう感情に戸惑いはある。それでもこの時ばかりは、自分の直感を信じたかった。

「あの、それでは、わたしこれで……」

彼女が頭を下げ、一哉に背を向けて歩き出そうとした。何事もなかったように離れていく姿を見て、一哉はあたふたして手を伸ばす。

「待って！」

一哉は、彼女の手首を乱暴に掴んだ。

「えっ!? あの、何か……?」

「……少し、いいかな?」

声が震える。そんな自分に驚きはしたが、久しぶりに味わわせてもらったこの感情は嫌ではない。それどころか、一哉に影響を与える彼女にさらに引き寄せられる。

一哉は頬を緩め、こちらを見上げる彼女と目を合わせた。一瞬にして恥ずかしそうに目を伏せ、彼女は逃げようとする。それでも一哉は、手首を握ったまま一歩さらに近づく。

「あ、あの……な、なんでしようか?」

彼女は、怯えながらも応じる。逃げ出すことは考えていないと踏み、一哉はそっと手を離した。すると、彼女は一哉の前でその手をさっと背に回した。その行動さえも愛らしく思える。

「俺は大賀見一哉。審査員席から、舞台袖にいる君の姿が目に入っただろ。君は、ランウェイへ向かうミスキャンパスの候補者たちに声をかけていただろう? 君が話しかけたら、皆肩の力を抜いて素敵な笑顔になっていた。とてもいい仕事をしてたね」

「あ、ありがとうございます！」

一哉の言葉に、彼女はまるで花が開いたように明るい笑顔になった。

「最終選考まで残った人たち皆には頑張ってもらいたくて……。舞台へ上がる直前に声をかけられるのはわたしだけででしたから、なるべく彼女たちの緊張をほぐしたかったんです。そうは言ってもただ、こんな風を楽しめるなんて最高ね」とか「ターンしたらわたしに笑顔を見せてね」と言っただけなんですけどね」

つい先程まであんなに照れていた彼女が、今は目をキラキラと輝かせて楽しそうに話している。それがあまりに眩しくて、一哉は彼女に吸い寄せられた。

「そうだったのか。いったい何を言っていたのかとずっと気になっていたんだ。君の頑張ってほしいという素直な気持ち、彼女たちに伝わったんだね。相手を思いやれる気持ちを、これからもなくさないでほしいな」

彼女は嬉しそうに微笑むが、突然はにかんだ表情を浮かべる。

「あの、実は……わたし、来年からモデル事務所で働くんです」

「えっ？ モデル!？」

一哉は彼女の言葉に哑然とした。彼女は小動物のようにふんわりとした雰囲気をもとつていて、可愛いと思う。だがはつきり言って、モデルとして通用するとは思えない。第一、身長が足りない。どうやってもステージモデルは無理だ。

だが改めて冷静に観察すると、彼女には武器があった。この艶やかな長い黒髪は、パーツモデルとして十分通用する。

一哉はたまたまず手を伸ばし、彼女のポニーテールにした長い黒髪に触れた。

「あ、あのー」

戸惑う彼女には目もくれず、一哉は指の間をさらさらと滑る上質の髪の毛に驚嘆した。

誰が彼女をスカウトしたかわからない。だが一哉は、その人物に拍手を送りたい気分だった。

彼女はモデル業界へ足を踏み入れる。ここで彼女を落とさなくても、来年になれば彼女の方から自然と一哉のテリトリーに入ってくる。この業界は、広いようで実はかなり狭い。だから、焦らなくていい。今はアピールだけして、彼女の心に自分のことを刻ませる。そうしておけば、来年再会した時にはもつと近寄りやすくなるに違いない。

自分の考えに満足した一哉は、ふっと笑った。

「なるほど。それなら来年になれば俺と会えるね。そうだ——」

さりげなく言って、一哉はスーツの内ポケットに入れていたケースを取り出し、名刺を一枚抜き取った。さらに、ペンでひとつの番号を書き添える。

「プライベート用の携帯番号を書いておいた。この業界に入ってきたら、俺に連絡をしてくれないか？ 今日君も忙しいし、俺もこのあと仕事があつて時間を割けないんだ。いいかな？」

一哉は名刺を彼女に差し出す。それをおぼおぼと受け取った彼女は、じつと名刺を見るが、すぐに頬を染めた顔で一哉を見上げた。

「あつ、はい！……ありがとうございます！」

「じゃ、約束だ」